比較言語学入門Ⅳ

日　野　資　成

0．はじめに

比較言語学シリーズも今回で第4回目となった。第1回から第3回までの主な目次を次に掲げる。

Ⅰ　1　比較言語学に貢献した人々
　　2　方法論
　　3　世界の諸言語の分類
　　4　祖語再構の問題とその解き方
Ⅱ　1　音韻変化
　　2　意味変化
　　3　語彙変化
　　4　文法変化
Ⅲ　1　品詞
　　2　語順
　　3　格
　　4　態
　　5　呼応

第1回は導入として，比較言語学に貢献した人々・方法論・世界の言語の分類を示した。第2回は言語変化という観点から世界の諸言語を比較検討した。第3回は品詞・語順・格など文法の諸観点から世界の言語を比較検討した。今回は世界の言語を音韻という観点から比較してみたい。

音韻とは，私たちの頭の中にある抽象的な音の集まりで，その一つ一つを**音素（phoneme）**という。音韻は/ /で表される。たとえば，「りんご」を表

す音韻は/ringo/で表され，それはさらに/r/,/i/,/n/,/g/,/o/の五つの音素に分けられる。ここで,/ringo/の五つの音素のうち,/r/を/b/に置き換えると/bingo/(ビンゴ)になる。また,/ringo/の/i/を/o/に置き換えると/rongo/(論語）になる。/**r**ingo/と/**b**ingo/,/r**i**ngo/と/r**o**ngo/などのペアを**ミニマルペア**（minimal pairs）というが，このように，一つの音素を置き換えると別の単語として認識されるので，音素は人間が単語のちがいを聞き分けるのに必要な最小限の音の単位といえる。音素には/a/,/i/,/u/,/e/,/o/などの母音と/b/,/g/,/k/などの子音がある。第1節では，世界の言語の子音と母音の音素リストを比べ，さらに，どの音素がより一般的であるかを論じ，音素の順位付けを示す。

子音と母音の一つ一つの音の単位を**分節**（segments）という。一方，分節を組み合わせてできた単位である日本語の**拍**(**モーラ**)（子音と母音を組み合わせた単位。/ka/,/su/など）や，英語の**音節**（syllable)，さらに**アクセント**（accent）・**強勢**（stress）や**声調**（tone）を**超分節**（suprasegmentals）という。第2節では，超分節という観点から世界の言語を比べる。超分節によって世界の言語を分類すると，強勢言語・音節言語・拍言語・声調言語に分類できる。強勢言語を2．1で，音節言語を2．2で，拍言語は2．3で，声調言語については2．4で扱う。また，2．5では日本語と英語をリズムという観点から比べてみたい。

音韻は，ある一定の環境で変化するが，音韻変化には法則がある。第3節では，音韻変化の観点から諸言語を比べる。音韻の融合について3．1で，音韻の同化について3．2で検討する。

1．音素

まずは，世界の言語の音素を比べてみよう。1．1で世界の代表的言語の音素のリストを示し，次に1．2で世界の言語における一般的な音素を指摘する。

1．1　音素のリスト

音素とは，人間が単語のちがいを聞き分けるのに必要な最小限の音の単位

で，諸言語によって異なっている。音素は大きく子音と母音に分けることができる。ここでは，それぞれの言語について，まず子音の音素を，続いて母音の音素を取り上げる。

まずは，英語の子音の音素リストを次に挙げる。

表1　英語の子音の音素リスト（O'Grady et al.より）

		唇音	唇歯音	歯間音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	無声	p			t		k	ʔ
	有声	b			d		g	
摩擦音	無声		f	θ	s	ʃ		h
	有声		v	ð	z	ʒ		
破擦音	無声					tʃ		
	有声					dʒ		
鼻音	有声	m			n		ŋ	
流音	有声側音				l			
	有声そり舌音				r			
わたり音	有声					j	w	

表1で，横は調音点（発声する場所）を示す。調音点は左から右にいくにしたがって，口の表面から奥に移動する。縦は調音法（発声のし方）を示す。破裂音・摩擦音・破擦音は有声・無声の区別がある。鼻音・流音・わたり音はみな有声である。

続いて英語の母音の音素リストを挙げよう。

表2　英語の母音の音素リスト（O'Grady et al.より）

	前舌（front）	中舌（central）	奥舌（back）
小開き(high)	i		u
	I		ʊ
中開き(mid)	e	ʌ	o
	ɛ		ɔ
大開き(low)	æ		ɑ

横は発音するときの舌の位置を，縦はあごの開き具合を示す。英語の母音の音素は全部で14あり，/i/の発音は［ij］，/e/は［ej］，/u/は［uw］，/o/は［ow］である（音素は/ /を使って示される）。続いて，日本語の子音の音素リスト

を示す。

表 3　日本語の子音の音素リスト

		唇　音	唇歯音	歯間音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	無　声	p			t		k	
	有　声	b			d		g	
摩擦音	無　声				s			h
	有　声				z			
破擦音	無　声							
	有　声							
鼻　音	有　声	m			n			
弾　音						r		
わたり音	有　声					j	w	
	無　声							

表 1 と表 3 を比べると，英語の方が子音の音素が多いことがわかる。たとえば/f/,/v/などは，英語にあって日本語にない音素である。英語では face [feis] と vase [veis] はミニマルペアとなり，アメリカ人はこの二つをはっきり聞き分けることができる。一方日本語には/f/と/v/という音素がないので，日本人が face と vase を聞き分けるにはある程度の練習が必要である。続いて，日本語の母音の音素は,/a/,/i/,/u/,/e/,/o/の 5 つである。

表 4　日本語の母音の音素リスト

	前舌 (front)	中舌 (central)	奥舌 (back)
小開き (high)	i		u
中開き (mid)	e		o
大開き (low)		a	

/u/と/o/は英語よりも唇の丸くなる度合いが低い。表 2 と表 4 を比べると，母音の音素も英語の方が圧倒的に多い。

次に，ハワイ語の子音の音素を示す。

表5　ハワイ語の子音の音素リスト（Hawaiian Grammar より）

		唇　音	唇歯音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	無　声	p				k	ʔ
	有　声						
摩擦音	無　声						h
	有　声						
破擦音	無　声						
	有　声						
鼻　音	有　声	m		n			
流　音	有声側音			l			
わたり音	有　声					w	

ハワイ語には8つしか子音の音素がない。したがって，多言語から外来語が入る場合，その語がハワイ語の音素を使って表されるため，もとの音とはかなり変化する。たとえば，英語の Merry　Christmas はハワイ語では Mele Kalikimaka となる。母音音素リストは次のとおりである。

表6　ハワイ語の母音の音素リスト（Hawaiian Grammar より）

	前舌（front）	中舌（central）	奥舌（back）
小開き（high）	i		u
中開き（mid）	e		o
大開き（low）		a	

日本語と同じく5母音であるが，小開き奥舌母音の/u/が，日本語の/ u /よりも唇が丸まって発音される点が異なる。

次に韓国語の子音の音素リストを挙げる（『スタンダードハングル講座』ハングル表より）。

表 7　韓国語の子音の音素リスト

		唇　音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音 無声	平音	p	t		k	
	激音	p^h	t^h		k^h	
	濃音	p’	t’		k’	
摩擦音 無声	激音		s			h
	濃音		s’			
破擦音 無声	平音			tʃ		
	激音			$tʃ^h$		
	濃音			tʃ’		
鼻音 有声		m	n		ŋ	
流音 有声				r		

韓国語では，無声子音の/p/, /t/, /k/, /tʃ/に平音・激音・濃音の区別があり，同じく無声子音/s/には激音と濃音の区別がある。激音は破裂のあとに強い呼気を伴う無声音，濃音は破裂のあとに全く呼気が出ない無声音である。これらのうち/p/, /t/, /k/, /tʃ/の無声子音は，語頭では無声であるが，語中では有声音の［b］，［d］，［g］，［dʒ］となる（音素は/ /で，異音は［ ］で表す）。この有声・無声は**相補分布（complementary distribution）**であり，有声音は音素とはならない。一方，/p/, /t/, /k/, /tʃ/とその激音/p^h/, /t^h/, /k^h/, /$tʃ^h$/，濃音/p’/, /t’/, /k’/, /tʃ/は音素であり，ミニマルペアを作ることができる。以下にそれらの音の現れるミニマルペアを挙げる。

(1)　韓国語の平音・激音・濃音のミニマルペア

平音と濃音 paruda 張る　　p’aruda 速い，すばしこい

平音と激音 pari 女性用の真鍮製の食器 p^hari 蝿

/r/も語頭・語中で/r/，語尾で［l］となり，相補分布をなしており，より分布範囲が広い/r/を音素とする。母音の音素は以下のとおり 8 つである。

表 8　韓国語の母音の音素リスト

	前舌（front）	中舌（central）	奥舌（back）
小開き（high）	i	ɯ	u
中開き（mid）	e		o
	ɛ		ɔ
大開き（low）		a	

最後に，中国語の子音の音素リストを挙げる（『初めて学ぶ中国語』14ページの声母表を書き直したもの）。

表 9　中国語の音素リスト

		唇　音	唇歯音	巻舌音	舌歯音	歯茎音	硬口蓋音	声門音
破裂音	無　気	b				d		g
	有　気	p				t		k
摩擦音	有　気		f	shr	s		ʃ(x)	h
破擦音	無　気			zh	ts'(z)		dʒ(j)	
	有　気			ch	ts(c)		tʃ(q)	
鼻　音	有　気	m				n		
流　音	有気側音					l		

中国語の破裂音と破擦音は，有声・無声でなく，**無気（unaspirated）・有気（aspirated）**の区別がある。摩擦音・鼻音・流音はみな有気音である。母音の音素は以下のとおりである。

表10　中国語の母音の音素リスト

	前舌（front）	中舌（central）	奥舌（back）
小開き（high）	i		u
中開き（mid）	e		o
大開き（low）		a	

日本語と同じく５つであるが，/i/は口を左右に引き，/u/と/o/は唇を丸めて発音する。

１．２　音素の順位付け

これまでは，世界のいくつかの言語について音素リストを示した。第１節の最後に，世界の言語において，どの音素がより一般的であるかを，子音と母音の順で述べる。

１．２．１　子音の順位付け

子音の順位付けをするのに必要な，世界の言語に見られる事実を，次に箇条書きにする（O'Grady et al.352ページより）。

①遮断音（破裂音・摩擦音・破擦音をまとめて**遮断音（obstruent）**という。）

の中で，ある言語に摩擦音があれば，その言語には必ず破裂音がある。逆に，ある言語に破裂音があっても，その言語に摩擦音があるとは限らない。破裂音のない言語はない。一方，東オーストラリアのキダバル語では，摩擦音はないが，破裂音はある。このことから，破裂音は摩擦音よりも順位が高いといえる。

②遮断音の中ではまた，ある言語に破擦音があれば，その言語には必ず摩擦音がある。逆に，ある言語に摩擦音はあっても，その言語に破擦音があるとは限らない。たとえば，フランス語には，破裂音，摩擦音はあるが，破擦音はない。このことから，摩擦音は破擦音よりも順位が高いといえる。

③破裂音・摩擦音・破擦音では，無声音が有声音よりも一般的である。これは，ある言語に有声の遮断音があれば，その言語には必ず無声の遮断音があるからである。逆に，無声の遮断音があっても，有声の遮断音があるとは限らない。たとえば，アイヌ語の遮断音には無声の遮断音/p/, /t/, /k/, /tʃ/, /s/しかない。

④無声の破裂音/p/, /t/, /k/の中では/p/が最も一般的でない。というのは，アルート語，ヌビアン語などには，/t/, /k/はあっても/p/がないからである。また，/t/が最も一般的である。

⑤最も一般的な摩擦音は/s/である。というのは，ナンディ語，ウェリ語の摩擦音には/s/しかないからである。次に一般的な摩擦音は/f/である。

⑥世界の言語には，鼻音が少なくとも１つはある。その場合，最も一般的なのは/n/である。というのは，ワイオミングで話されているアラパホ語の鼻音には/n/しかないからである。続いて一般的な鼻音は/m/である。

⑦世界巣の言語にはたいてい流音がある。しかし，ナイジェリアで話されているエフィク語のように，流音がない言語も，少数ではあるがある。

以上の事実から，子音の順位付けをすると次のようになる。

(2) 世界の言語の子音の順位付け（より一般的な子音が左に位置する）

遮断音　/t/・/k/・/p/, /d/・/g/・/b/, /s/・/f/, /z/・/v/, /tʃ/・/dʒ/

鼻音　/n/, /m/

流音　/r/

1．2．2　母音の順位付け

世界の言語の約半数は，/i/，/e/，/a/，/o/，/u/の5つの母音を持つ。しかし，オーストラリアの言語であるグダンジ語は/i/，/u/，/a/の3つの母音しかない。現代の沖縄語も同様である。/i/，/a/，/u/の中では/a/が最も一般的，続いて/i/，/u/と続く。/e/と/o/は同様に一般的である。母音の順位付けは次のようになる。

(3)　世界の言語の母音の順位付け（より一般的な母音が左に位置する）
　　/a/，/i/，/u/，/e/，/o/

2．超分節

ここでは，超分節（強勢・音節・拍・アクセント・声調）の観点から世界の言語を比較してみたい。強勢言語・音節言語・拍言語・声調言語の順に述べる。

2．1強勢言語

強勢言語（stress-timed language）とは，強勢のある音節（syllable）がほぼ等しい時間間隔で現れる言語で，英語・ドイツ語・ロシア語などが代表的である。ここでは，英語の例を挙げる。

(4)　Péter Píper pícked a péck of pickled péppers.
　　（Best Mother Goose Ever より）

これはマザーグースの詩の一つであり，早口ことばとしても用いられているが，強勢のあるところ（アクセントマークがついている）で手をたたきながら読むと，6つの拍がほぼ同じ長さであることがわかる。強勢言語におけるアクセントは強弱アクセントである。強弱アクセントによって，単語を区別することができる。たとえば，次のように名詞と動詞を区別することができる。

(5)

名詞	動詞
désert（砂漠）	desért（捨てる）
prógress（前進）	progréss（前進する）

また，次のように，固有名詞と普通名詞を区別することもできる。

(6) 固有名詞　　普通名詞

Wh̀ite Hòuse（ホワイトハウス）　whìte hóuse（白い家）

固有名詞 White House の場合，主アクセント・副アクセントの順になるが，普通名詞 white house の場合，逆に副アクセント・主アクセントの順になる。

ロシア語でも，次のように，アクセントの位置によって意味が変わる (O'Grady et al: p.354 より)。

(7) アクセントによる語の対比（ロシア語）

múka	拷問にかける	mukā	粉
zámok	城	zamók	鍵をかける
rúki	手	rukí	手の（単数属格）

2．2　音節言語

音節言語（syllable-timed language）とは，個々の音節がほぼ等しい時間間隔で現れる言語で，フランス語が代表的である。フランス語では，1音節は原則として「子音＋母音」からなる。この点では日本語と同じである。例を挙げよう（『フランス語入門』16ページより）。

(8) animal　→　a-ni-mal　動物

(9) cruel　→　cru-el　残酷な

(8)の animal は英語では an-im-al となるが，フランス語では「子音＋母音」の原則にのっとって a-**ni**-**ma**l となる。(9)の cruel は英語では1音節だが，フランス語では，母音が連続する場合，その間で切る。

2．3　拍言語

拍言語（mora-timed language）とは，個々の拍（モーラ）がほぼ等しい時間間隔で現れる言語で，日本語が代表的である。日本語の一拍は，フランス語と同じように「子音＋母音」からなっている。たとえば，「かさ（傘）」は，「か（ka）」と「さ（sa）」という2つの拍からなり，「か」は，子音 k と母音 a，「さ」は子音 s と母音 a からなっている。拍「か」と拍「さ」はほぼ同じ長さで発音される。文の例を次に挙げる。

(10) 傘を差す（かさをさす）

手をたたきながら「かさをさす」と言ってみよう。5拍がほぼ同じ長さで発音されることがわかる。「パン pan」,「本 hon」などは最後が子音 n で終わるが，この n（撥音）も一拍に数える。また，「きって（切手）」など，小さい「っ」で表される促音も一拍として数える。さらに，「ボール」などの長母音も一拍として数える。したがって，次の語はみな3拍からなる。

(11) メロン［meron］　切手［kitte］　ボール［booru］

日本語では，短母音と長母音の区別によって次のようにミニマルペアを作ることができる。

(12) 日本語の長短母音によるミニマルペア

短母音	長母音
おばさん［obasan］	おばあさん［oba:san］
ビル［biru］	ビール［bi:ru］

このように，長短母音の区別があるのが，拍言語の特徴の一つである。ハワイ語にも長短母音によるミニマルペアがある。

(13) ハワイ語の長短母音によるミニマルペア（Hawaiian Grammar: 15ページ）

短母音	長母音
kohola（岩礁）	kohola:（くじら）
mala（痛み）	ma:la（庭）
hio（風が吹く）	hio:（もたれかかる）

しかし，ハワイ語は，強弱アクセントを持つので，強勢言語に含めるべきである。一方日本語のような拍言語は，高低アクセント（pitch accent）を持ち，それによって語と語を区別することができる。たとえば，二つの「あめ」が次のアクセントによって区別される。

(14)

単語	アクセント
あめ（雨）が	高低低
あめ（飴）が	低高高

三つの「はし」も次のように区別できる。

(15) 単語　アクセント

はし（箸）が　高低低

はし（橋）が　低高低

はし（端）が　低高高

ハワイ語には，このような音の高低による語の区別はない。

2．4　声調言語

声調（tone）とは，語の意味を区別するのに役立つような声の高さの段階である。声調言語の代表的な言語は中国語である。中国語では，次のように，四つの声調（四声）によって単語を区別することができる（『初めて学ぶ中国語』10ページより）。

(16) 中国語の声調（四声）

声調	発音記号	意味
第一声	mā	おかあさん
第二声	má	麻
第三声	mǎ	馬
第四声	mà	叱る

第一声は高く平らに伸ばし，第二声は一気にひき上げ，第三声は低く抑え，第四声は一気に下げて発音する。

ラトビア語も声調言語である。ラトビア語では，次のように，三つの声調によって単語を区別することができる（O'Grady et al.: p.353 より）。

(17) ラトビア語の声調（三声）

声調	単語	発音記号	意味
第一声	loks	[lùoks]	弓
第二声	loks	[lūoks]	緑玉葱
第三声	loks	[lûoks]	窓

2．5　リズム

ここでは，日本語と英語のリズムを比較してみたい。**リズム（rhythm）**とは，音の強弱，高低，長短などによってパターン化，グループ化されたつな

がりである。日本語は拍言語であり，きまった拍数の組み合わせによって独特のリズムを生み出すことができる。短歌は五・七・五・七・七，俳句は五・七・五という一定のリズムを持つ。たとえば，次の啄木の短歌を見てみよう。

(18) 東海の　小島の磯の　白砂に　われ泣きぬれて　蟹とたはむる

五・七・五・七・七のリズムを持っているだけではない。母音のつながりを見てみよう。

(19) T**oo**kaino k**o**jimanoisono shirasunani w**a**ren**a**kinurete k**a**nitot**a**-hamuru

上の句では，Tookai の to と kojima の ko には母音/o/が含まれ，頭韻を踏んでいる。また下の句では，ware の wa，nakinurete の na，kanito の ka，tahamuru の ta に母音/a/が含まれ，頭韻を踏んでいることがわかる。

次に，山口誓子の俳句を挙げよう（The Essence of Modern Haiku より）。

(20) 冬河に　新聞全紙　浸り浮く

五・七・五のリズムを持っているだけではない。この句も，母音の構成を見よう。

(21) F**u**yukawan<u>i</u> shinbun zensh<u>i</u> ts**u**kar<u>i</u> **u**ku

Fuyukawa の fu，tsukari の tsu，uku の初めに母音/u/が含まれ，頭韻を踏むとともに，Fuyukawani の ni，zenshi の shi，tsukari の ri に/i/が含まれ，脚韻を踏んでいる。この句は，小平氏と Marks 氏によって英語に翻訳されている。

(22) A **w**intry ri<u>ver</u>　**w**ith a newspaper open　**w**ide on the **w**at<u>er</u>

A wintry river が 5 音節，with a newspaper open が 7 音節，wide on the water が 5 音節からなり，リズムを持っている。また，wintry，with，wide，water が/w/で始まり，頭韻を踏んでいるとともに，river，water では最後の-er で脚韻を踏んでいる。

次に，英詩と日本語訳を紹介する。

(23) 英詩と日本語訳

Christmas Chain	クリスマス　リング
Christmas day will soon be here	クリスマスまで　あと少し。
And I can hardly wait.	もうこれ以上　待てないわ!
I've made this little Christmas chain,	このクリスマス　リングはね,
To help me celebrate.	お祝いのために　作ったの。
Each day I'll snip one loop from it	毎日リングを　ひとつずつ
To help me to remember,	はさみでチョンと　切り取って,
That happy happy Christmas day,	楽しい楽しい　クリスマス
Is the 25th of December.	私は絶対　忘れない。
Please help me hang my chain up high.	高いところに　飾らせて。
I'll cut one loop each day,	毎日ひとつ　切り取って,
And when we reach the golden loop,	金(きん)のリングに　届いたら,
It will be happy Christmas Day!	今年もハッピークリスマス

日野資成　訳

英詩では，3つの連ともに2行目と4行目で脚韻を踏んでいる（第1連は[-eit]，第2連は[-ember]，第3連は[-ei]）。日本語訳では各連ともに七・五・七・五からなり，リズムを生むとともに，第2連では4つの行の初めの拍に母音/a/を含んで頭韻を踏んでいる（mainichi，hasami，tanoshii，watashiwa）。

3　音韻変化

ここでは，音韻の融合と同化にしぼって比較検討する。

3．1　融合

融合(fusion)とは二つの音韻が一つになることで，諸言語に見られる。日本語では，上代に次のような融合があった。

(24) 上代日本語の融合現象（『国語史概説』３７ページより）

①咲き＋あり＝　咲けり　　saki＋ari　＝　sakeri（左**家**理）

②高　＋市　＝　高市（たけち）　taka＋iti　＝　taketi（多**気**知）

①では/i/と/a/が融合して/e/になり，②では/a/と/i/が融合して/e/となっている。「左**家**理」と「多**気**知」は万葉がな表記で「家」は甲類の/e/を，「気」は乙類の/e/の表記である。

鎌倉時代に発生したオ段の長音も融合である。

(25) 鎌倉時代の融合現象（『新版国語学要説』３８ページより）

①ａ ＋ ｕ＝ŏ［ɔ:］「申（まう）す」が「申す」になるなど。

②ｅ ＋ ｕ＝ô［o:］「けふ（今日）」が「きょう」になるなど。

①のŏ［ɔ:］の方は口を開いて発音されたので**開音**，②のô［o:］の方は口をすぼませて発音されたので**合音**という。

現代のぞんざいな発音にもこの現象が見られる。

(26) 現代の融合現象

①ａ ＋ ｉ＝e:（「うまい」が「うめえ」になるなど）

②ｏ ＋ ｉ＝e:（「おもしろい」が「おもしれえ」になるなど）

英語でも，中世英語から近代英語に移る過程で，say［sai］が［se:］（さらに［seɪ］）になる），maid［maid］が［me:d］（さらに［meɪd なる］）になるなどの融合があった。

フランス語では，母音とそれに続く鼻子音が鼻母音に融合する。

(27) フランス語の融合

①ｏ ＋ ｎ＝õ　（Japon の発音が［ʒapõ］になるなど）

②ａ ＋ ｎ＝ã　（France の発音が［frã:s］になるなど）

３．２　同化

同化（assimilation）とは，ある音が隣接する音に影響されて似た音になる現象である。日本語では，たとえば鼻音/n/が次のような音に変化する。

(28) 日本語の鼻音/n/の同化

	公　式	意　味
①	/n/ → [m]/_両唇音	両唇音の前で両唇鼻音［m］になる。 例　/si**n**bun/ → [ʃi**m**bun]（新聞）
②	/n/ → [n]/_歯茎音	歯茎音の前で歯茎鼻音［n］になる。 例　/ka**n**dai/ → [ka**n**dai]（寛大）
③	/n/ → [ŋ]/_軟口蓋	音軟口蓋音の前で軟口蓋鼻音［ŋ］になる。 例　/ha**n**ga/ → [ha**ŋ**ga]（版画）
④	/n/ → [ɲ]/_硬口蓋音	硬口蓋音の前で硬口蓋鼻音［ɲ］になる。 例　/ha**n**ɲa/ → [ha**ɲ**ɲa]（般若）

すべて直後の子音と同じ調音点の鼻音に変化している。たとえば①では，直後の/b/の調音点（両唇音）と同じ調音点を持つ鼻音［m］に変化している。これらは，うしろの音が前の音に影響しているので**逆行同化（regressive assimilation）**という。一方，上代語で，「思はゆ」は「思ほゆ」に変化した。これは，前の音[omo]（思）の/o/にうしろの音[pa]が影響されて[po]になったので，**順行同化（progressive assimilation）**という。

複合語の二番目に来る語の初めの無声子音が有声化する**連濁（sequential voicing）**も同化の一種である。

(29) 連濁の例

①雪/yuki/ ＋ 国/**k**uni/ ＝ 雪国/yuki**g**uni/

②竹/take/ ＋ 竿/**s**ao/ ＝ 竹竿/take**z**ao/

③空/kara/ ＋ 焚き/taki/ ＝ 空焚き/kara**d**aki/

二番目の語の初めの無声子音/k/・/s/・/t/が，複合語の中ではそれぞれ有声音/g/・/z/・/d/に変化している。これは，前の語の最後の有声である母音に続くからで，有声の順行同化といえる。

韓国語では，尾子音［-p］，［-t］，［-k］のあとに鼻音が続くと，それぞれ［-m］，［-n］，［-ŋ］になる。

(30) 韓国語の鼻音同化

①十［ʃi**p**］＋ 万[man] ＝ 十万[ʃi**m**man]

②花［k'o**t**］＋ だけ[man] ＝ 花だけ[k'o**n**man]

③百［pæ**k**］＋ 万[man] ＝ 百万[pæ**ŋ**man]

調音点は全く変わらないので，これは調音法（鼻音）の同化である。うしろの鼻音が前の子音に影響を与えるので，この同化は逆行同化である。

5　おわりに

今回は音韻という観点から世界の言語を比較してみた。まず音素については，世界の言語の中でもより一般的な子音・母音を挙げることができた。/t/, /k/, /p/や/n/, /r/などがより一般的な子音であり, /a/, /i/, /u/がより一般的な母音である。

また，超分節については，世界の言語を強勢言語・音節言語・拍言語・声調言語に分類することができた。ハワイ語については，拍言語としてとらえられがちであるが，強弱アクセントを持つことから，強勢言語に含めた。

さらに，音韻変化については，融合と同化という現象について，世界の言語における共通性を取り上げることができた。

今回取り上げた言語は，世界の言語の中でも，比較的なじみのある言語ばかりであった。今後は，さらに多くの言語を取り上げて，音韻という観点からより詳しく比較検討してみたいと思う。

参考文献

国語史概説　松村明　1972年　秀英出版

新版国語学要説　佐藤喜代治　1973年　朝倉書店

スタンダードハングル講座　梅田博之　金東俊　1989年　大修館書店

初めて学ぶ中国語　依藤　醇　1989年　語研

フランス語入門　石坂忠之　1959年　白水社

Best Mother Goose Ever. 1970. Scarry Richard. New York: Western Publishing Company.

Contemporary Linguistics Third Edition. 1997. O'Grady William, Michael Dobrovolsky, Mark Aronoff eds., New York: St. Martin's Press.

Hawaiian Grammar. 1979. Samuel H. Elbert and Mary Kawana Pukui. Honolulu: University of Hawaii Press.

The Essence of Modern Haiku 300 Poems by Seishi Yamaguchi. 1993. Translated by Kodaira Takashi and Alfred Marks. Mangajin Inc.